

日英語命令形の機能領域の相違

森 英 樹

The Difference in Functional Domains of Japanese and English Imperatives

Hideki MORI

Abstract

Typological research has revealed that the Japanese language is characterized by the fact that one form tends to have more than one function and broad functional domains. The present paper, however, shows that this tendency does not manifest itself in imperative forms. The functional domain of Japanese imperatives is narrower than that of English imperatives. This paper also claims that the difference in the functional domain results from the degree to which pragmatic inference is needed in the process of grammaticalization involved.

Keywords

多機能性、命令形、文法化、語用論的推論

1 序

命令形の表現を英語と日本語で比較してみると、ある相違点に気づく。(1)と(2)を考えてみよう。

- (1) a. Open the door!
b. Say that again, and I'll beat you.

- (2) a. ドアを開けろ！
b. もう一度言ってみろ、殴るぞ。

(1 a)と(2 a)は共に典型的な命令文で相手に何か行為を実行させるための発話である。命令の意味を表わす際、英語では動詞原形の命令形が使われ、日本語では動詞を命令形に活用させたものが使われる。形式と意味の関係において、この時点で両言語に違いはない。しかし、(1 b)と(2 b)には形式的な違いが含まれている。2つとも脅迫の文脈で使用される命令形で、先ほどの典型的なものとは違って、述べられた内容を話し手は聞き手に要求していない。むしろ、逆のことを願っている。こうした意味を言語コード化する際、英語は(1 a)と同様に動詞原形を用いる。一方、日本語は動詞の命令形を使うのだが、そのとき必ず「みる」の命令形が用いられる。実際、(2 b)で「言う」の命令形だけが使われていたとしたら、その命令形は本来意図された脅迫の意味機能を果たすことはない。

命令文をめぐるはこれまで様々な立場から研究がなされてきた。Jespersen (1940)、Bolinger (1977)、Quirk et al. (1985)、Davies (1986)、Huddleston and Pullum (2002) 等は、英語の命令文の形式と意味の詳細な記述を与えている。生成文法の立場からは、Potsdam (1998)、Han (2000) 等が様々な言語の命令文を取り上げて論じた。日英語の命令文の機能的・認知言語学的な分析としては、高橋 (2004)、Takahashi (2004) や Mori (2007) が挙げられる。日本語の条件命令文の歴史的な研究としては、Shinzato (2002) や Mori (2006) が文法化の観点から考察している。そして、van der Auwera et al. (2009) の研究から命令文の類型論的な研究の高まりもうかがえる。これらを背景として、本研究では、(1) や (2) に見られるような命令の形式と意味が対応のずれに焦点を当て、類型論で明らかになっている日本語の特徴を再検討する。

以下の構成は次のようになっている。第2節では日本語と韓国語の類型論的研究を紹介し、そこから導かれた日本語の傾向を確認する。その特徴を日本語と英語の命令形によって検証するため、第3節では両言語の命令形の特徴に基づいて日英語の命令形の機能領域の違いを明らかにし、命令形に関して日本語は英語よりも多機能的ではないことを示す。そして、第4節では日英語命令形の機能領域の相違がどのように生じたのかを、語用論的推論と命令形の言語発達の観点から論じる。最後の第5節は本論文の結論である。

2 構造的多機能性

本節では、堀江・プラシャント (2009) で論じられた日本語と韓国語の類型論研究のいくつかを紹介しつつ、そこから明らかになった日本語の構造的多機能性に関する一般化を確認する。

まず最初に取り上げたいのは、動詞の活用形に関してである。一般に、日本語の場合、動詞の終止形と連体形は同一の形となることが知られている (寺村 1982; Iwasaki 2000等)。

- (3) a. ひとりで黙々と勉強する人
b. ひとりで黙々と勉強する。

(堀江・プラシャント2009: 134)

例えば、「勉強する」という動詞の場合、「人」を修飾する (3 a) の形が連体形、句点でわかるように文末に生じる (3 b) の形が終止形である。機能は異なるものの、いずれも「勉強する」で表面的な形は同一である。さらに、連用形が名詞として扱われることもある。

- (4) a. 日本に行き、友達に会った。
b. 行きは10分ぐらいですが、帰りはもっとかかります。

(ibid.)

(4 a) に挙げた「行く」の連用形「行き」が、(4 b) のように名詞としても機能するのである。このように日本語では、終止形と連体形、連用形と名詞がそれぞれ同一の形式で異なる機能を果たすのだが、韓国語で同じことは当てはまらない。

- (5) a. honcase mwukmwukhi kongpwuha-nun salam

ひとりで 黙々と 勉強する-現在連体形 人
「ひとりで黙々と勉強する人」

b. honcase mwukmwukhi kongpwuha-n-ta.

ひとりで 黙々と 勉強する-現在-終結語尾
「ひとりで黙々と勉強する。」

(ibid. ; 表記を一部変更)

(5 a) の「勉強する」の連体形 *kongpwuha-nun* と (5 b) の終止形 *kongpwuha-n-ta* の形態はそれぞれ異なっていることに注意したい。日本語との比較で次も考えてみよう。

(6) a. ilpon-ey ka-se chinkwe-lul manna-ss-ta.

日本-に 行く-接続 友達-対格 会う-過去-終結語尾
「日本に行き (行って)、友達に会った。」

b. 連用形の該当用法なし

(ibid. ; 表記を一部変更)

(6 a) の *ka-se* は日本語の連用形「行き」に対応するが、*ka-se* を日本語の (4 b) のように名詞として機能させることは韓国語では不可能である。

次にアスペクトの形式を比較する。(7) で日本語の代表的なアスペクト表現として「ている」を考えよう。

- (7) a. 太郎が走っている。
b. 太郎がいすに座っている。
c. 太郎はすでに本を3冊書いている。

(堀江・プラシャント2009: 164; 表記を一部変更)

(7 a) の「ている」は動作の継続 (進行) を表わし、(7 b) では結果状態の継続が表わされている。(7 c) の「ている」は完了 (パーフェクト) の意味である。いずれも意味機能は異なるが、日本語では同一の形式「ている」が用いられる。一方、韓国語の対応表現を見てみよう。

(8) a. Minswu-ka cikum talli-ko iss-ta.

ミンス-主格 いま 走る-進行-終結語尾

b. Minswu-ka uyca-ey anc-a iss-ta.

ミンス-主格 椅子-に 座る-結果状態-終結語尾

c. Minswu-nun sosel-ul sey kwen ss-ess-ta.

ミンス-題目 小説-対格 3冊 書く-過去-終結語尾

(ibid. : 165; 表記を一部変更)

(8 a) の *ko iss* が動作の継続 (進行) を、(8 b) の *a iss* が結果状態の継続を、そして (8 c) の *ess* がパーフェクトの意味を表わしている。ここで重要な点は、3種類のアスペクトの意味にそれ

ぞれ別の形式が割り当てられているということである。日本語ではすべて同一の「ている」で扱われる機能が、韓国語ではそれぞれ異なる形式を使うのである。

日本語では、動詞の連体形と終止形が同じでそれぞれ別の機能を持ったり、動詞連用形が名詞機能を果たしたり、アスペクトの多様な意味を単一形式で表わしたりと、一つの形式に機能が多数割り当てられている。一方、韓国語では、連体形と終止形の動詞形態は区別され、連用形が名詞機能を持つことはないし、アスペクトの異なる意味には異なる形式が対応している。こうした観察を通して、堀江・プラシャント（2009）は次のような一般化を導く。

- (9) 形式（構造）と意味の対応関係に関して、日本語は1つの形式に複数の意味を対応させるという多義性（多機能性）の傾向が韓国語よりもより顕著に観察される。

（堀江・プラシャント 2009：164）

韓国語と比較したとき、日本語は構造的に多機能である傾向が高いというわけである。次節以降では、命令形という他の言語形式を使って（9）の日本語の特徴を別の角度から検討してみたい。

3 命令形の機能領域

3.1 日英語の命令形の諸特徴

英語にも日本語にも命令形という特殊な文法形式が存在する。しかし、冒頭で触れたが、日本語の命令形を英語と対照させると様々な相違点が浮かび上がってくる。命令形に備わる機能性には両言語で違いがあるのである。まずは、典型的な命令文の形態から見ていこう。

- (10) Open the door!

- (11) a. ドアを開けろ！（これ以上、怒らせるなよ。）
 b. ドアを開けなさい！（さあ、早く出てきなさい。）
 c. ドアを開けてくれ！（頼むから。）
 d. ドアを開けてください！（お願いだから。）

(10) と (11) の対照から、両言語の違いは明白である。英語では、1つの命令の形式であっても、話し手と聞き手の関係など文脈によって様々に解釈される（もちろん音調等による違いはある）。しかし、日本語では、(11 a) から (11 d) に見るように、多岐に渡る状況に応じて、それぞれ微妙に異なる表現形式が存在する。実際、英語に比べて日本語の命令形が豊富であることは、Takahashi (2004) ですでに指摘されており、Takahashi (2004：207-210) は、英語の命令形を日本語では「しろ」「なさい」「くれ」「ください」等の異なる形態に訳し分けて考察している。さらに、高橋 (2003) では英語の書物を日本語に翻訳したものを調査して、英語で命令形の文が必ずしも日本語で命令文として訳されるわけではないということを明らかにしている。また、異なる形式が存在するという事は、例えば、威圧的に相手に実行を強制したいときは (11 a) の形式を使うのであって、その文脈で (11 d) の形式を用いることは不適切となるということでもある。

次に、冒頭でも触れた脅迫の文脈で使われる命令形に注目しよう。上で見た典型的な場合と違っ

て、話し手が聞き手に行為の実行を望んでいない状況で使用されるような命令形である。

(12) Say that again, and I'll beat you.

- (13) a. もう一度言ってみろ、殴るぞ。
b. * もう一度言え、殴るぞ。

英語の (12) は、典型的な命令文の形式の (10) と同じである。すなわち、動詞原形によって脅迫の意味機能が果たされている。それに対して日本語では、(13 a) からわかるように、「てみろ」という別の動詞「みる」の命令形が介在している。脅迫という、言わば威圧的な状況なので、(11 a) で見た「しろ」タイプの形式が使用されるのだが、単に「言う」の命令形「言え」では機能しないことが (13 b) からわかる。脅迫の機能を持たせるために英語では動詞の原形さえ使えば済むところを、日本語では「てみろ」という命令形式を使うことが求められる。動詞の命令形だけでは脅迫の機能を果たせないため、別の動詞の「助け」を得ているのである。

最後に、否定辞を含むような命令文についてはどうであろうか。

- (14) a. Don't read my diary!
b. They don't read my diary.

- (15) a. 私の日記を読むな！
b. * 彼らは私の日記を読まな。
c. 彼らは私の日記を読まない。

英語では (14 a) のような否定命令文では動詞原形の前に否定辞 *don't* が置かれる。この否定辞は (14 b) の命令文以外の否定文でも使用されるものである。しかし、日本語では (15 a) の否定命令文で生起する「な」は、(15 b) が示すように命令文以外で使われることは許されない。(15 c) のように別の否定辞「ない」を用いなければならない。このように、否定命令文の形式に関して、英語と日本語の間には一般の否定辞を使用できるか否かという点で相違が見られる。

まとめておくと、命令形の形態に関して、英語よりも日本語の方が豊富であることが最初の特徴である。次に、脅迫という意味機能は、英語では通常の命令形で表わせるが日本語では別の語彙が必要となる。最後に見た特徴は、命令形の否定辞は英語では通常のものと同じだが、日本語では命令形特有のものであるということである。

3.2 日英語命令形の機能領域の相違

上で見た3つの特徴からわかるのは、命令形に関して、英語では単一の形式で表わされる意味機能が、日本語では複数の形式で表わされているということである。最初に見た日本語に命令の表現形式が豊富にあることは正にこの通りである。脅迫の命令形に関する特徴も、脅迫の機能を果たす英語の命令形は、日本語では要求等の典型的な意味機能を持つ形式と脅迫の意味機能を担う形式に分化していると考えられる。同様に、否定命令形も、英語では単一の形式のところを、日本語では通常の否定と命令の否定というように複数の形式が対応すると見なせる。次

の (16) から (18) の表は、日英語の命令形の機能領域がいかに異なるかをまとめたものである。

(16)

英語の命令形	日本語の命令形	対応する意味機能
動詞原形	しろ	威圧的な命令
	なさい	「しろ」より丁寧
	くれ	要求・懇願等
	ください	「くれ」より丁寧

(17)

英語の命令形	日本語の命令形	対応する意味機能
動詞原形	動詞命令形	典型的な命令
	動詞+てみろ	脅迫

(18)

英語の否定辞	日本語の否定辞	対応する意味機能
don't	な	命令文の否定辞
	ない	通常否定辞

こうした日英語の命令形の諸特徴を念頭に置いて、第2節で確認した日本語の性質を思い起こそう。(9) で明らかになったのは、日本語は1つの形式が複数の機能を担う傾向があるということであった。命令形という観点からこの類型論的特徴を見た場合、(16) から (18) の英語と日本語の対応状況が示すように、日本語の構造的多機能性の特徴は見られないということが判明する。ただし、(9) の一般化は韓国語との比較から提示された一般化なので、英語と日本語を対照させた本研究からの一般化は(9) を直接反証したことはならない。日本語と韓国語の命令形を比較した結果を待たなければならないが、それは今後の研究課題としたい。

4 語用論的推論と言語変化

英語の命令形と対照させた場合、日本語の命令形に関して、その構造的多機能性は英語よりも低いことが判明したが、本節では、両言語のそうした機能領域の相違が生じる理由を、脅迫を表わす命令形の言語発達を手がかりに考える。

言語表現の中には、形式と意味が一致している場合もあれば一致していないものもある。英語でも日本語でも、命令形によって話し手の望まない状況が表現される脅迫の形式はその一例である。

- (19) a. Come closer and I'll shoot.
b. 近づいてみろ、撃つぞ。

- (20) a. If you come closer, I'll shoot.
b. もし近づいてみろ、撃つぞ。

脅迫という状況下で、(19) で述べられた「近づく」という命題的内容は話し手の意図とは逆のも

ので、典型的な命令形機能とは一線を画している。そして、条件という新たな意味が含意される。実際、英語では (20 a) のように通常の条件節として解釈できるし、日本語では (20 b) のように命令形であるにもかかわらず条件標識「もし」と共起できる。Mori (2007) によれば、(19) のようなタイプの命令文は、英語と日本語でその発達の過程が異なる。具体的には、脅迫のような条件解釈を持つ命令形式が確立した過程で関与したのは、英語では等位接続構造であるのに対し、日本語では命令構文の中で使われる視覚動詞「見る」である。

発達過程の相違は、英語と日本語の命令形に条件解釈が生じる必要最小限の単位からうかがえる。

- (21) a. Come closer and I'll shoot.
 b. Come closer. I'll shoot.
 c. One step closer and I'll shoot.
 d. Come closer * (and I'll shoot).

(21 a) は (19 a) と同じであり、脅迫に伴う条件解釈は生じる。接続詞を省略した (21 b) でも条件解釈を生み出す因果関係は、文脈から解釈できる。さらに、(21 c) では、命令形ではなく単に名詞句が接続詞の前に置かれているだけであるが、(21 a) のような条件解釈は可能である。しかし、(21 d) のように、*and* 以降を省略して文脈からも結果となりうる事態が何も想定できないたら、近づくことを命令する命令形として解釈され、脅迫の条件解釈は困難となる。以上を踏まえると、英語の場合、接続詞は省略可能だが、前後の文が存在することが条件解釈を生み出すのに必要な形式であるということがわかる。では、日本語の場合はどうだろうか。

- (22) a. 近づいてみる、撃つぞ。
 b. * 近づけ、撃つぞ。
 c. * 近づいてみる／みれば。撃つぞ。
 d. 近づいてみる、*(撃つぞ)

(22 a) は (19 b) と同じで条件解釈を持つ。(22 b) では補助動詞化した「みる」がないことに注意したい。この場合、条件の意味は持たない。(22 c) に「みる」は存在するが命令形になっていない。(22 c) で使われている要素自体は (22 a) と共通しているが、命令形になっていないがために条件解釈が生じない。(22 d) は英語と同様、後半部は省略できないことを示している。つまり、日本語の命令形に脅迫の条件解釈が伴うのは、前後の文がそろい、前の文で使用される動詞に補助動詞「みる」の命令形が付加されるときである。以上をスキーマ化したのが (23) である。

- (23) 命令形が条件解釈を生み出すようになる単位
 a. 英語：X + (接続詞) + Y
 b. 日本語：X てみる + Y

言語変化において、より抽象的な文法形式を生み出していくプロセスのことを文法化といい、これまで様々な研究がなされてきた (Brinton and Traugott 2005; Bybee 2003; Bybee et al. 1994; Heine

1992, 2003; Heine et al. 1991 a, 1991 b; Hopper and Traugott 2003 [1993]; Traugott 1989, 2003等)。文法化をもたらす要因としては、メタファー等の認知能力、使用頻度、そして語用論的推論による役割等が指摘されてきた。本研究では、最後の語用論的推論に注目して、日英語命令形の機能領域の違いを再検討していきたい。

(23) に示したように、英語であれ日本語であれ、命令形が命令という文字通りの意味を超えて、より抽象的な条件解釈を生み出すプロセスは文法化の一種と考えてよい。すると、文法化の要因に語用論的推論があるわけなので、英語と日本語の命令形の文法化に際して、(23 a) と (23 b) のそれぞれの形式に語用論的推論が働くことになる。元々、(23) の形式には脅迫の条件解釈は含意されていないが、語用論的推論によってこれらの形式にコード化されていない意図された解釈が積極的に読み込まれ、次第に定着・確立したと考えられる。ここで注目したいのは、(23 a) と (23 b) の形式の抽象度の違いである。英語の場合、具体的な要素はないが、日本語では「てみる」という具体的な語彙が含まれている。言語コード化されていないものを汲み取るのが語用論的推論なので、言語コード化の程度が高い日本語の方が英語よりも相対的に語用論的推論の役割は小さくて済む。

本論文で明らかになったことは、英語と日本語の命令形の機能領域について、英語の方が相対的に広いことであった。英語命令形は1つの形式に複数の意味機能を持たせるのに対し、日本語命令形では異なる意味機能に応じて異なる形式を対応させる傾向がある。(24)は、堀江・ブラシャント(2009)の日本語と韓国語の研究から提示された、機能領域の相違と語用論的推論の役割の相違である。

- (24) 日本語：「コードの経済性」を優先→曖昧さを解消する上で話し手と聞き手の間で共有された知識や文脈のキューなどに広範囲に訴える→語用論的推論の果たす役割：大
- 韓国語：「意味的透明性」を優先→言語形式及び、形式から意味への写像を容易にするために表層形式を必要に応じて増す→語用論的推論の果たす役割：日本語に比べて相対的に小さい。

(堀江・ブラシャント 2009：167)

動詞形やアスペクト形式に関して、機能領域が韓国語よりも広い日本語は言語コード化を最小限にとどめた結果、語用論的推論の役割を増大させる必要がある。しかし、本研究で扱った命令形に関しては、機能領域は英語の方が日本語よりも広いので、日本語で語用論的推論の果たす役割は(24)で示されたものから逆転して、英語に比べて相対的に小さいことになる。このことを(23)の単位から条件解釈を発達させるとき求められる語用論的推論とあわせて考えると、日英語命令形の機能領域の相違の理由が推測される。より抽象度の高い単位で文法化する際にはより多くの語用論的推論が必要で(=英語)、より具体性の高い単位で文法化する際の語用論的推論の役割は相対的に小さい(=日本語)。この対比こそ、機能領域が広く語用論的推論の役割が大きい英語命令形と、英語に比べて機能領域が狭く語用論的推論の役割が小さくて済む日本語命令形に見られた機能領域の相違の歴史的動機づけである。このことは(25)のようにまとめられる。

(25) 日英語命令形の機能領域の相違と歴史的動機づけ

	英語の命令形	日本語の命令形
文法化の単位の抽象性	高い	低い
文法化の際の語用論的推論	多い	少ない
解釈の際の語用論的推論	多い	少ない
構造的多機能性	高い	低い

表中の「文法化の単位の抽象性」と「文法化の際の語用論的推論」は通時的な視点に関わる項目で、「解釈の際の語用論的推論」と「構造的多機能性」は主に共時的な視点に関わる項目である。

5 結論

類型論研究から明らかになった日本語の特徴に、1つの形式に複数の意味を対応させるという構造的多機能性の傾向がある。本論文は、日本語と英語の命令形を対照させながらこの傾向を検証した。まず、日本語では文脈に応じて異なる意味機能に異なる命令形式が対応して命令の表現形式が豊富だが、英語では同じ命令形式を持つものが異なる文脈でも使用される。また、脅迫という条件解釈を持つような意味機能として、英語では典型的な命令の意味を表わす命令形と同じ命令形で表わされるが、日本語では典型的な場合と異なる命令形「てみろ」が存在する。さらに、否定命令形に関しても、英語では単一の形式であるところを、日本語では通常否定と命令の否定というように複数の否定辞が対応する。このように、命令形に関しては、日本語の方が英語よりも相対的に構造的多機能性が低いことがわかった。さらに本研究では、こうした機能領域の相違が、言語変化における構造的仕組みと語用論的推論の相互作用の相違から生じるという可能性を探った。文法化する際の構造的な単位の注目したとき、抽象度の高いものには語用論的推論がより多く必要で、具体性の高い構造には言語コード化されている割合が多いわけなので語用論的推論の役割は少なく済む。条件解釈を生み出す脅迫の命令形の文法化では、英語にはより抽象的な構造が、日本語にはより具体的な構造が文法化の単位となっている。ここから、英語の場合の文法化にはより多くの語用論的推論が必要とされ、日本語の場合の文法化には相対的に少ない推論で済むことになる。この文法化の際の語用論的推論の役割の相違が、本研究で示した日英語命令形の機能領域の相違として反映しているのである。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London.
- Brinton, Laurel and Elizabeth C. Traugott (2005) *Lexicalization and Language Change*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Bybee, Joan (2003) "Mechanisms of Change in Grammaticization: The Role of Frequency," *The Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Brian Joseph and Richard Janda, 602–623, Blackwell, Oxford.
- Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Clark, Billy (1993) "Relevance and 'Pseudo-Imperatives'," *Linguistics and Philosophy* 16, 79–121.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (1997) "Semantic Subordination despite Syntactic Coordination," *Linguistic Inquiry*

- 28, 195–217.
- Davies, Eirlys (1986) *The English Imperative*, Croom Helm, London.
- Han, Chung-Hye (2000) *The Structure and Interpretation of Imperatives: Mood and Force in Universal Grammar*, Garland, New York.
- Heine, Bernd (1992) “Grammaticalization Chains,” *Studies in Language* 16, 335–368.
- Heine, Bernd (2003) “Grammaticalization,” *The Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Brian Joseph and Richard Janda, 575–601, Blackwell, Oxford.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünnebmeyer (1991 a) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, and Friederike Hünnebmeyer (1991 b) “From Cognition to Grammar: Evidence from African Languages,” *Approaches to Grammaticalization*, Vol. 1, ed. by Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine, 149–187, John Benjamins, Amsterdam.
- Himmelmann, Nikolaus P. (2004) “Lexicalization and Grammaticalization: Opposite or Orthogonal?,” *What Makes Grammaticalization? A Look from its Fringes and its Components*, ed. by Walter Bisang, Nikolaus P. Himmelmann, and Björn Wiemer, 21–42, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- Hopper, Paul and Elizabeth C. Traugott (2003[1993]) *Grammaticalization*, 2nd Edition, Cambridge University Press, Cambridge.
- 堀江薫・プラシヤント, パラデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』 研究社, 東京.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Iwasaki, Shoichi (2000) “Suppressed Assertion and the Functions of the Final-Attributive in Prose and Poetry of Heian Japanese,” *Textual Parameters in Older Languages*, ed. by Susan C. Herring, Pieter van Reenen and Lene Schosler, 237–272, John Benjamins, Amsterdam.
- Mori, Hideki (2006) “The V-*te-miro* Conditional Imperative and Other Imperative Forms: Grammaticalization of Lexemes in Constructions,” *Journal of Japanese Linguistics* 22, 1–16.
- Mori, Hideki (2007) *Three Types of Imperatives and Related Constructions: A Contrastive Study of English and Japanese*, Ph.D. dissertation, Osaka University.
- Potsdam, Eric (1998) *Syntactic Issues in the English Imperative*, Garland, New York and London.
- Shinzato, Rumiko (2002) “From Imperatives to Conditionals: The Case of *~shiro/are* and *~te miro* in Japanese,” *CLS* 38 (1), 585–600.
- 高橋英光 (2004) 「命令文の日英比較」 *JELS* 21, 179–188.
- Takahashi, Hidemitsu (2004) *The English Imperative: A Cognitive and Functional Analysis*, Ph.D. dissertation, Hokkaido University.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語シンタクスと意味 I』 くろしお出版, 東京.
- Traugott, Elizabeth C. (1989) “On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change,” *Language* 65, 31–55.
- Traugott, Elizabeth C. (2003) “Constructions in Grammaticalization,” *The Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Brian Joseph and Richard Janda, 624–647, Blackwell, Oxford.
- van der Auwera, Johan, Andrej Malchukov, and Ewa Schalley (2009) “Thoughts on (Im) perfective imperatives,” *Form and Function in Language Research: Papers in Honour of Christian Lehmann*, ed. by Johannes Helmbrecht, Yoko Nishina, Yong-Min Shin, Stavros Skopeteas, and Elisabeth Verhoeven, 93–106, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.